

『井筒』解釈の多義性

——婚姻の形態から——

INTERPRETING *IZUTSU*

From the Point of View of Marriage Systems

Ruxandra MARGINEAN*

It is usual practice in *no* studies to analyse *no* scripts as texts, from a literary point of view. In this paper I shall take *Izutsu* as an example and analyze its interpretations from the point of view of what is usually considered the social background to literature.

To put it differently, I intend to reconsider the way interpretation is usually thought to reveal the “universal” meaning of a text — a meaning that would go beyond the interpreters' differences of gender, class and living epoch.

First, I would like to have a look at interpretations of *Izutsu* in contemporary society. As opinion polls show, when *Izutsu* is performed at Nogakudo, the audience evaluates the leading character's attitude in various ways. This is related, I think, with the diversification of opinion towards the

*ルクサンドラ・マルジネアン ブカレスト大学（ルーマニア）を卒業後、早稲田大学大学院に入学、現在同大学院博士課程に在学。論文に「能の作品研究における解釈の規則およびその真実について——『井筒』のいくつかの解釈を巡って——」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第42輯）、「観客の代表としてのワキについて——野上説を中心に——」（『西洋比較演劇研究会会報』第19号）など。

marriage system in nowadays Japan.

I would like then to question the existence of multiple interpretations of *Izutsu* in medieval society. The story of *Izutsu* is based on Kamakura period commentaries on *Ise Monogatari* (as the well known article “Yokyoku to *Ise Monogatari* no Hiden” by Ito Masayoshi has shown). Researchers do not agree whether the 24th *dan* of *Ise Monogatari* and its medieval commentaries are inserted or not in the text of *Izutsu*. If one takes into account medieval poetry treatises (such as *Seiasho*) about *honkadori*, one can say, I think, that the 24th *dan* of *Ise Monogatari* is not alluded to in *Izutsu*.

I would like to consider the interpretation of the 24th *dan* of *Ise Monogatari* as seen in medieval commentaries, as well as its not being included in *Izutsu* from the point of view of the medieval marriage system. According to Tabata Yasuko, aristocrats (*kuge*) and warriors (*buke*) had rather different marriage systems. Would not this fact have had an influence on the way *Izutsu* was interpreted in the middle ages?

The above analysis touches on the larger problem of the power-relationships that exist behind what is usually considered to be a unique “correct” interpretation of a text/play.

1 はじめに

謡曲を「文学」として取り扱う能の作品研究という分野においては、「歴史的背景」と「作品」がそれぞれ個別した世界として意識され、研究者の解釈によって「テキスト」の文学的意味・価値として明かされるものがあくまでもテキストのみにある、「歴史」性のない「普遍的」なものとなっている。つまり、「研究者」の立場からの「意味」・「現代観客全員」の立場からの「意味」・「中世の観客全員」の立場からの「意味」が同格化され、「普遍的な意味」として論じられている。本発表では、こうした従来の謡曲分析を検討し直して見た

い。『井筒』を取り上げ、時代・階級・性別（ジェンダー）といった「享受者」の「社会的背景」と『井筒』解釈との相互関係について考えて見たい。

まず最初に、『井筒』の物語構造やその出典を簡単に説明しよう（資料1参照）。旅の僧が、在原寺を訪れ、そこが業平と紀有常の女の夫婦の旧蹟で、また「風吹けば沖つ白波龍田山……」という歌が詠まれた場所だと昔を偲んでいると、里の女が現れる。彼女が古塚に回向をし、忘れられない思いがあることを表す。（ここまでの部分をAとする。）旅僧が里の女にその素姓を問う。里の女は、「風吹けば沖つ白波龍田山夜半にや君がひとり越ゆらむ」という歌を詠んだことで有常の女が高安の女の書へ通っていた夫の心を取り戻したという、業平と有常の女夫婦の結婚後の一エピソードを語る。（ここまでの部分をBの前半としたい。）そして、彼女は、「筒井つの井筒にかけしまろが丈過ぎにけらしな妹見ざるまに」という歌に関連する、業平と有常の女との結婚への過程について語る。里の女は、自分が「井筒の女」とも言われた紀有常の女であると名乗って、井筒の影に消える。（ここまでの物語はBの後半としたい。）業平の形見の衣を着た有常の女は旅僧の夢の中に現れ、「徒なりと名にこそ立てれ桜花、年に稀なる人も待ちけり」という歌を詠んだことで「人待つ女」と呼ばれたことを語り（ここまでの部分はCの前半としたい）、昔を懐かしむ気持ちを表す（「眞弓櫂弓年を経て」の文句が見られる）（ここまでの部分はCの後半としたい）。そして、「移り舞い」を舞い、昔を偲ぶ。夜明けと共に僧の夢が覚める（ここまでの部分はDと呼びたい）。

以上、『井筒』の物語構造であるが、『井筒』出典を簡単に紹介しよう。『井筒』のBの部分には『伊勢物語』の23段、また、そのCの前半の部分に『伊勢物語』の17段が投影されていると研究者は認めているが、『井筒』のCの後半の部分に関しては『伊勢物語』の24段及び『伊勢物語』の古註に見られる解釈が投影されているかどうかについては、研究者の意見が分かれている点である。簡略に説明すると、『伊勢物語』の古註において、24段の主人公、有常の女は、新しい恋人の所に通う夫、業平、を三年待った後、「新枕する」=再婚を決定

<p>D</p> <p>舞を舞い、昔を偲ぶ。夜明けとともに憎の夢がさめる。(略)</p>	<p>C 前半</p> <p>業平の形見の衣を着た紀有常の娘は旅僧の夢のなかに現れ、「あだなりと名にこそ立てれ桜花年に生まれなる人も待ちけり」の歌を詠んだこと、「人待つ女」と呼ばれたことを語り、</p> <p>後半</p> <p>昔を懐かしむ気持ちを表す。 〔真弓櫛弓年を経て〕の句の引用が見られる</p>
<p>今は亡き世に業平の、形見の直衣身に触れて恥づかしや、昔男に移り舞ひ、雪を廻らす花の袖。(略)</p>	<p>徒なりと、名にこそ立てれ桜花、年に稀なる人も待ちけり、かやうに詠みしもわれなれば、〔人待つ女〕とも言はれしなり、</p> <p>われ筒井筒の昔より、 真弓櫛弓年を経て、</p>
<p>①横道萬里雄、表章校注、『謡曲集』上 岩波書店 ②石田穠二訳注、『伊勢物語』角川書店 (学習院大学蔵本 翻刻) ③伊藤正義「謡曲と伊勢物語の秘伝」『金剛』64号の指摘による。</p>	<p>るを見て、心憂がりて行かずなりにけり。</p> <p>一七段</p> <p>見ごろおとづれざりける人の、桜のさかりに來たりければ、あるじ、 あだなりと名にこそ立てれ桜花 年にまれなる人も待ちけり 返し、 今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし 消えずはありとも花と見ましや</p> <p>二四段</p> <p>むかし、男、かたみなかに住みけり。官仕へしにとて、別れ惜しみて行きにけるままた、三年來ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろに言ひける人に、「今宵あはむ」と契りたりけるに、この男來たりけり。「この戸あけたまへ」とたたきけれど、あけて、歌をなむ、よみて、いだしたりける。</p> <p>あらたまの年の三年を待ちわびて ただ今宵こそ新枕すれ と言ひだしたりければ、 あづさ弓ま弓つき弓年を経て わがせしがことうるはしみせよ と言ひて、いなむしければ、女、 あづさ弓引けど引かねどもむかしより 心は君に寄りしものを と言ひけれど、男婦りにけり。女、いとかなしくて、しりに立ちて追ひ行けど、え追ひつかで、清水のある所にふしにけり。そこなりける岩に、およびの血して書きつけける、 あひ思はで離れぬ人をとどめかね わが身は今ぞ消え果てぬめる と書きて、そこにいたづらになりけり。</p> <p>〔智頭集〕「さくらに人まちえたる女 有常がむすめ」 〔冷泉家伊勢物語抄〕「年頃音づれざりけるといふは、業平官仕に京へ行て、彼二条の后故に、東山に押し違られて、三とせこねは、年比と云」 〔返し〕の心は、(中略) 新枕すれと説めるにて聞こへたり」 〔冷泉家伊勢物語抄〕「三とせこざりけりといふは、二条の後の御事故に、(中略) ゆかまををいふ也」 「あけてとは、業平二条後の御事故に勸勤を蒙れば、有常が娘の爲には、無本意思ひて來りけれど、無左右うちとけざりけるを、戸をあけてといふ也」 「あづさ弓ま弓つきゆみとは、(中略) 三年也。三年あはぬ事をいふ也」</p>

<p>A</p> <p>旅の僧が在原寺を訪れ、そこが業平と紀有常の娘の夫婦の田舎であること、また、「風吹けば沖つ白波龍田山」という歌が詠まれた場所であること、と昔を偲んでいると、里の女が現れる。彼女が古塚に回向し、忘れられない思いがあることを表す。</p>	<p>「井筒」本文(1)</p> <p>(中略)</p> <p>さなきだに 物の淋しき秋の夜の、一目帰なる古寺の、庭の松風ふけ過ぎて、月も傾く軒端の草、忘れて過ぎし古へを、忍ぶ顔にていつまでか、閉ことななくてながらへん、げになににことも思ひ出の、人には残る世の中かな。</p>	<p>「伊勢物語」(2)</p> <p>二三段</p> <p>むかし、あなわたりひしける人の子ども、井のもとにいでて遊びけるを、大人になりければ、男も女も恥ぢかばしてありけれど、男はこの女をこそ得めと思ふ、女はこれの男と思ひつつ、親のあはずれども聞かでなむありける。さて、このとなりの男のもとより、かくなむ。</p> <p>筒井つづの井筒にかけしまろがたけ 過ぎにけらしな妹見ざるまに 女、返し くらべこしかりわけ髪も肩過ぎぬ 君ならずして誰かあぐべき など言ひ言ひて、つひに本意のごとくあひにけり。</p> <p>さて年ごろ経るほどに、女、親なく頼りなくなるまに、もろともいふかひなくであらむやほど、河内の国、高安の郡に、行き通ふ所いできにけり。さりけれど、このもとの女、あしと思へるけしきもなく、いだしやりければ、男、こころありてかかるにやあらむと思ひうたがひて、前萩の中に隠れあて、河内へいぬるかほにて見れば、この女、いとよう化粧して、うちながめて、</p> <p>風吹けば沖つ白波龍田山 夜半にや君がひとり越ゆらむ とよみけるを聞きて、かぎりなくかなしと思ひて、河内へも行きなかりにけり。まれば、高安に来て見れば、はじめこそ心にくもつくりけれ、今はうちとけて、手づから飯匙とりて筒子のうつつはものに盛りけ</p>	<p>「伊勢物語」の古注(3)</p> <p>「冷泉家伊勢物語抄」(こ)どもとは、有常が娘と業平と、おさなりかりし事なり」</p> <p>書陵部木「智頭集」(業平のことにはあらず。はるかかふるさよのものがたりを、これにかきまじへたる也)」</p>
<p>B 前半</p> <p>旅僧が里の女にその素姓を問う。里の女は、「風吹けば沖つ白波龍田山」という歌を詠んだことで紀有常の娘が高安の女のところへ通つていた夫の心を取り戻したという、業平と紀有常の娘の夫婦の結婚後の1エピソードを語る。</p> <p>後半</p> <p>そして、里の女が、 「井筒にかけしまろがたけ 過ぎにけらしな妹見ざるまに」という歌に関連する業平と紀有常の娘との結婚への過程について語る。 里の女は、自分が「筒筒の女」とも呼ばれていた紀有常の娘であると名乗って井筒の影に消える。</p>	<p>(中略)</p> <p>また河内の国高安の里に、知る人ありて、道に、忍びて通ひ給ひに、風吹けば沖つ白波龍田山、夜半にや君がひとり行くらん心、おぼつかかみの夜の道、行くへを思ふ心とけてよその契りは離れがれなり、げな情、知る泡沫の、あはれを述べしも理なり。</p> <p>(中略)</p> <p>昔、この国に、住む人の、ありけるが、宿を並べて、門の前、井筒によりて、うなゐ子の、友だち、語らひて、互いに影を水鏡、面を並べ袖をかけ、心の水もそこひなく、移る月日も重なり、大人しく恥ぢがはましく、互いに今はなりにけり、その後かのため男、言葉の露の、玉草の、心の花も色添ひて、筒井筒、井筒にかけしまろがたけ、生ひにけらしな、妹見ざる間に、読みて贈りけるほどに、そのとき、女も比べ来し、振り分け髪も、肩過ぎぬ、君ならずして、たれか、上くべきと、互いに詠みしゆゑなれや、筒井筒の女とも、聞こえしは、有常が、娘の古き、名なるべし。(中略)</p>	<p>「智頭集」(あ)中わたらひしける女、これとはをきむかしし事なり 名なし」</p> <p>つ、あつ、の女(彰)考館文庫蔵「伊勢物語次第条々事」(「智頭集」の末書)に見られる。</p>	

する。再婚する夜に業平が戻ってくる。有常の女は彼への思いを訴えるが、業平が信じず、そのまま去っていく。

こうした古註における『伊勢物語』の24段の解釈が『井筒』に投影しているか否かに関する、伊藤正義と西村聡を代表者とした議論^①は、「中世」における『井筒』の読み方についてのものであり、本発表の後半に、私の小考を述べたい。その前に、ここで、「現代」における『井筒』の読み方として、両系統解釈をもう少し詳しく見てみたい。つまり、本発表で、まず、『井筒』の現代解釈の、現代における「普遍性」を問うことにしたい。そして、発表の後半に、『井筒』の「中世的」な「普遍的」な意味を問うてみたい。

2 現代社会における『井筒』解釈の多義性

伊藤は次のように言う。

「筒井筒の昔より業平との結婚を待ち、結婚後は高安の女へ通う夫のわが許へ帰るのを待ち、三年間の空白を桜と共に待ち三年目の夜業平を追って、追い続けて息絶える（中略）人待つ女のひたむきな業平への思慕が美女男装の移り舞いという形で、激しいまでのたかまりを見せる。」^②

以上では、謡曲Cの部分に現れている「人待つ女」という表現が「待つ」という語彙が見られない謡曲の他の部分のすべてに拡大されている。その結果、完全なテーマの統一性が果たされる。しかし、この解釈過程では、「人待つ女」という主題と矛盾する24段の「再婚」のエピソードが排除されている。（資料2（末尾参照）、解釈種類①）

この解釈の他に、伊藤の説を踏まえている研究論文、あるいは、国立能楽堂の『井筒』プログラムに見られる解釈は、24段と「人待つ女」としての主人公の性格との矛盾をどのように解決するかによって、3種類に分けられる（資料2、解釈種類②-④）

もう一方の西村の解釈は、伊藤とは異なって、「人待つ女」という表現が見られる謡曲Cの部分と「待つ」という語彙が見られるAの部分との関連をみい

だしている。

西村も『井筒』を「人待つ女」の「主題」の展開として読むが、彼はこの「主題」の他に、BとDの「移り舞い」を結ぶ「副題」の存在をも

「初恋の全き幸福と、第三者の介在によって生じたあらゆる不安に耐えて
のちの愛の復活」

のように指摘している。つまり、西村の解釈は完全な「テーマの統一性」を提供していない（資料2、解釈種類⑤）。

『伊勢物語の24段と『井筒』との関連に関して、西村と同じ立場にある論者は、謡曲のどの部分とどの部分の関連を「主題」として認めるか、また、副題をも認めるかどうかによって、5種類に分けられる（資料2、解釈種類⑥-⑩）。

以上、伊藤派4種類、西村派6種類の解釈が確認できよう。こうした『井筒』の幾つかの解釈の分析が示している通り、能の作品研究において「普遍的」と思われるテキストの「意味」が、「テーマの統一性」という共通した意識の働きによって生じるものの、常に多義性のままである。つまり、ここで、「テキストの解釈が読者との共同作業によるものである」、と指摘した記号論者U・エーコ^③の発言に首肯せざるを得ない。言い換えれば、解釈者の「観点」によって、「テキスト」の「意味」の相違点が生じる。

そして、社会学^④が示している通り、解釈者の「観点」は、「普遍的」なものでは有り得ず、解釈者が生きている時代・社会によって構築されているものであり、時代性・社会性・個人性をもったものである。

「観点」の「時代性」は何であろうか。前述の10種類の解釈を生み出す「テーマの統一性」という共通した意識は、「テキスト」に「有機的な統一性」を認めるロマン派評論家以降の文学観によって構築されているものであり^⑤、テキスト解釈の今日的規則である。読者の「個人的」観点の介入によって、こうした共通した解釈の規則の使用が一つの「普遍的」な意味ではなく、複数の解釈を生む。

そして、「観点」の「社会性」は何であろうか。以上の10種類の解釈を見る

と、そのほとんどが、『井筒』の主人公の「思い」・「待つ」ことを「ひたむきな思慕」（伊藤）・「理想の男業平をいっしんに恋い添う女主人公」（西村）「愛の永遠性」（国立能楽堂プログラム14号）のように、プラス評価する傾向にある。しかし、三宅晶子による次の解釈が表している通り、これは「男性的」な読み方・評価の仕方である。三宅晶子は

「男を許し続け、男を待つだけという女、表面的にはそう見える『井筒』の女は、（中略）本当のところは誰も必要ではないくらい孤独な女だ（中略）。男の目から見た理想の恋人というのは、女の側からみると、完全なる自立を果たし、自分の意志でいきでいける能動的な人間である」

と言う^⑥。この解釈は、意味の「普遍性」の名のもとで提供されているが、「男性的」な読み方に「女性的」な読み方をならべているものとして、「意味」の「普遍性」とは逆に、「ジェンダー」意識による解釈の多義性を物語っている。

社会学が示している通り、個人の生まれた体の「性別」をどのように意識するかによって「女性」である・「男性」であることへの「ジェンダー」アイデンティティ感覚が生じる——この意識は、教育過程などを通して、社会的に構築されるものである。従って、「男性的」・「女性的」な読み方が解釈者の性別と関係はなく、社会的に構築された解釈者「個人」の価値観の介入によって生じるものである^⑦。こうして以上の「男性」である西村聡の「女性側」にたつての『井筒』主人公の「辛さ」への意識・また、「女性である解釈者（馬場光子）の主人公の待つことへのプラス評価、完全な「男性的」な読み方との一致が説明できよう。更に、有常の女が再婚するエピソードを語る『伊勢物語』24段の『井筒』への導入を指摘する側の解釈に見られる、その段を軽く乗り越えようとする、あるいは、前述の伊藤正義の発言のように、それを無視しようとする処理の仕方が、「男性的」価値観の介入によるものとして説明できよう。

テキストの意味をテキストのみにあるとする従来の能の「文学的」研究においては特にこの側面に注意が払われてこなかったように思われる。この「歴史的背景」と解釈との相互関係を追及するために、1997年7月4日（橋の会の

『井筒』公演)・同年10月17日(鏡仙会の『井筒』公演)、二回に亘って、『井筒』に対する観客の評価をアンケートによってうかがった(アンケートのサンプルやその解答の結果は資料3(末尾参照)にまとめた通りである)。ほとんどの解答は、以上で取り上げた論文と同様、「可愛い女性」「やさしい女性」・「妻としてすばらしい」のように、主人公をプラス評価している。しかし、こうした「権威ある読み」に対しては、主人公が夫と別れない態度を好みながら、それをマイナス評価している「妥協的読み」も見られる(①が付いている答え)。例えば「日本の古いタイプ(自分を殺して、夫のことのみを思い続ける)の女」(女性50-60歳)と見る解釈、あるいは、前述の三宅晶子のように、主人公の気持ちを「対象のない愛」・「空の愛」と見る解釈は(②の付いている答え)それである。更に、わずかながら、主人公が離婚・再婚する態度を選ぶといった「抵抗的読み」をするケースも見られる(③の付いている答え)。

現代日本社会においては、事実上、「浮気」が離婚の30%の理由をも占めて^⑧おり、「家族」・「離婚」に対する男女の多様な価値観を表すデータがある^⑨。つまり、多様な価値観が現代の日本人の「ジェンダー」アイデンティティを構築しているなか、『井筒』の解釈の多義性も自然と生まれてくる。研究者の解釈が、「普遍的」な「意味」を明かすかのように思われているが、その解釈もこの多義性的一部分に過ぎない。

中世のテキストを分析しているが、その研究者の現代人という時代性やジェンダーなどのアイデンティティがその分析・解釈に色濃く投影されていると思う。

こうした分析の結果を踏まえて、以下では、『井筒』の「中世」的な「普遍的」な「意味」が論じられる余地があるかどうかについて考えたい。

3 中世における『井筒』解釈の多義性の可能性

イ 解釈(の「規則」)の「時代性」

まず、中世の観客は、古註を背景にした『伊勢物語』の24段を『井筒』に読

み取っていたのだろうか。この点に対して、前述の通り、研究者の意見が分かれている。

伊藤は、「あだなりと」歌の引用によって、また、「あづさ弓」の歌の一部分の引用によって、『伊勢物語』古注における有常女の物語がそのまま『井筒』に持ち込まれてくると指摘している。また、彼の論点を指示する堀口康生は、その理由が「本歌取り」にあると言う。

それに対して、西村は

「『井筒』の女主人公の亡霊は、こうして「人待つ女」としていきる時間の持続が結果した「迷ひ」の進化によって出現するのであり、『伊勢物語』24段のような彼女の死を決定付ける事件が出現の契機となったのではない」

のように、謡曲の「統一性」を主な理由として、古註における『伊勢物語』の24段の解釈の『井筒』への投影を否定している。

まず、先学における「統一性」の理由から考えて見たい。西村聡の解釈を支持する側に、竹本幹夫は、西村と同様に、有常娘の物語の「統一性」を理由に、「あづさ弓」の歌の一部分は古註の24段の物語を『井筒』を導入に至らないと次のように言う。

「17段（中略）・24段（中略）、互いに結末を全く異にする両話は、たとえ古註において三年間業平を待ち続けた有常の女という状況設定が共通するからと言っても、むしろそれが共通するだけに、かえって一連の筋書きの流れを構成するのは不可能ではなかろうか」¹⁰

確かに、我々は、西村と同様に、24段の主人公の「劇的な死」が『井筒』のプロットに合わないことを感じている。更に、我々には、17段と24段を古註のように統一された物語として考えるのは竹本の言うように「不可能」であろう。しかし、『冷泉家流伊勢物語抄』が表している通り、中世の人は17段と24段を統一された物語として考えていた。言い換えれば、古註が表している、矛盾をも含めた、中世人の見いだす物語の「統一性」と、前述の9種類の『井筒』解

積に見られるような、ロマン派以降現代人が期待してきた、矛盾を排除した物語の「統一性」とは異なった感覚に基づいていることは明らかであると言える¹¹⁾。従って、現代人としての我々の『井筒』の「統一性」感覚に反するからと言って、『井筒』に『伊勢物語』の24段が含まれていなかったらという逆推測ができないのではなかろうか。

むしろ、解釈学が明らかにした¹²⁾、読者が生きている時代の「解釈の規則」などによってあるテキストの解釈が時代と共に変化することを前提に、現代、我々が用いる「テーマの統一性」の解釈の規則に代わる、『井筒』への『伊勢物語』24段の投影の有無の判断の基盤をなしえた、中世の解釈の規則が何であったかを問うべきであろう。

それは、言うまでもなく、「本歌取り」の規則である。伊藤正義の説を受けた側は、「本歌取り」にその裏付けを求めた点では適切な姿勢を示していると思われるが、問題の『井筒』本文のCの後半の部分の「真弓櫂弓年を経て」を、例えば、『井蛙抄』¹³⁾に見られる「本歌取り」の種類に照らし合わせて見ると、それが「本歌のただ一ふしをとれる歌」であると考えざるを得ないと思われる。つまり、世阿弥時代の解釈では、『井筒』には、『伊勢物語』の24段は導入されていないと思われる。これについては、すでに考察発表済みである¹⁴⁾。

その結果、中世の観客から見て、謡曲のある種の「統一性」が生じたとする、何を「主題」と読むか、「副題」を認めるかどうかの要因などによって中世においても解釈の多義性が生じていたと思われる。(しかし、ロマン派以降のテーマの統一性への意識が強い現代人の中にも、『井筒』をある「主題」のもとで鑑賞していない観客がいる(アンケートに主人公を「浮気している夫を和歌で取り戻す風雅な女性」として評価する意見も見られる——つまり、謡曲全体のテーマよりも、謡曲のある部分に焦点を当てた解釈の仕方があるわけである)ことを考えると、中世の観客の「テーマの統一性」への意識の程度を冷静に疑問視する必要がある)。

ロ 「階級」・「ジェンダー」意識による解釈の多義性

先に述べたように、現代社会において、結婚・離婚に関する価値観の多様性・それを表すメディアや、個人の生きた環境などがすべて介入して、解釈の多義性を生むと同様に、中世社会においても、個人の属していた世界における婚姻形態、それに対する価値観、また個人の意識を構築した他の（文学的）テキスト・生きた経験などがすべて、『井筒』解釈の多義性をもたらしていたのではなかろうか。

中世の婚姻形態についてみてみたい。周知の通り、公家・武家の婚姻制度に著しい相違点があった。公家の場合、『伊勢物語』の24段も表している通り、「婿取り婚」という婚姻形態において、「男女どちらかが同居の場から離れて行くという無宣告の」¹⁵離婚が成立する。武家の場合、「嫁入り婚」という婚姻形態において、「嫁取りの主体が夫方の家夫長と夫に移り、そこに同居して生活がなされたため、婚姻の解消主体も夫側に移り」¹⁶、妻側の離婚成立が不可能ではないが、困難である¹⁷。鎌倉時代においては、例えば、摂政藤原兼実の日記『玉葉』が記している兼実の嫡子、左大将良経、と將軍頼朝の姪で檢非違使の長官、一条能保の娘との結婚のときに、両婚姻形態の間の衝突がみられ、公家側の勝に終わる¹⁸。しかし、室町時代は、武家側の婚姻制度が一般化し¹⁹、公家社会における「婿取り婚」が絶える²⁰時代である。こうした歴史を「公家」として生きていた人々による『井筒』の解釈はどのようなものだったのだろうか。冷泉家流系の古注を通して『伊勢物語』の17段・23段・24段を業平と有常の女の話として理解していた観客、そして本歌取りの規則を活かして『井筒』を解説し、24段の有常の女の話、『井筒』に読み取れないことが分った観客、「公家」的価値観をもった観客が、その『井筒』に反感を感じたり、また、その『井筒』に対して「抵抗的」読みをしていたとも考えられる。無論、逆に、「家と家との結びつきを意味し、そのため長期的安定的家族が望まれた」²¹武家社会に生き、その価値観をもった観客が、その『井筒』にプラス評価をしていたのではないかとの可能性もある。婚姻に対する「公家的」価値観の投影が不可

能・「武家的」価値観の投影が可能な『井筒』は、階級を問わずすべての観客に同じように「普遍的な」プラス評価として解されていたことは考えられるのだろうか。むしろ、『井筒』が「武家的」価値観の主張として、「武家的」価値観の正当化として感じられていたのではなかろうか。

さらに、武家社会における女性を考えると、例えば、『吾妻鏡』に描かれている、政子による、夫頼朝の「後妻打ち」²²の観点から『井筒』を考えてみると、『吾妻鏡』に表された価値観と一致した価値観をもった個人解釈者側からも、「夫の態度に対してなんの反発もしない」『井筒』の主人公に対して「女性的」な「抵抗的」読みを下していた可能性が十分考えられる。

4 展望・今後の課題

テキストとして論じられてきた能の意味が普遍的なものとして思われてきたが、本発表では、こうした構造主義的文学研究の方法に対して、主に社会学・記号論に視点を置いて、享受者の社会的立場によって解釈の多義性が生じることについて考えてみた。社会があらゆるグループの相反した価値観の摩擦である限り、テキストに対するあらゆる解釈の間にも力関係が潜んでいる。一つの解釈だけを「正しい」読み方として、「普遍的」な読み方として提供すること自体は、その解釈にその価値観が投影可能なグループの世界観を「自然」であるかのように語る＝構築することである。例えば、西村説を踏まえた国立能楽堂のプログラムは、謡曲B前半における「高安の女」との「三角関係」にふれてから、

「観客はそこに、単に業平と紀の有常の娘の愛の永遠性を見ているだけではなく、自らの心にある恋慕——少年はまだ見ぬ恋に思いを馳せ、青年は熱き思いを増幅し、熟年は暖かな思いやりで受け止め、老人は懐かしく甘美な郷愁を予備さます——を見て取ることができると思います」²³

と解釈している。このような解釈は、年齢・性別を問わず誰でも経験する「はず」の「あるべき愛の姿」を語り、つまり、愛の「普遍的」・「自然」な「あ

りさま」を語っている。その結果、こうした価値観をもたないグループ・個人が「不自然」なものとなされ、その価値観が改定されるようにプレッシャーがかけられている。こうした、社会における社会化（socialization）過程と能と関連をさらに追及すべき課題であるが、それは本発表の展開として、機会を改めて取り上げてみたい。

資料2 解釈の種類

- 24段在り ① B・C・D 統一主題「待つ」 24段が排除されている
 ② B・C・D 統一主題「人待つ女」 24段が矛盾として意識されている
 ③ B前半・C 主題「待つ」24段への言及のがあるが、主人公の「待つ」ことが強調されている
 ④ A・B・C前半 主題「待つ」24段が軽く乗り越えられている
- 24段無し ⑤ A・C 主題「待つ」
 B・D 副題「幸福・愛」
 ⑥ A・D 主題「恋の情念」=「いまここの十全な合一」
 A・B・C 副題「待つ」
 B 副題「共生の至福」
 ⑦ B前半・A・D 主題「観念作業としての思い」
 A 副題「待つ」
 B・D 副題「古への合一」
 B前半 「相愛関係」
 ⑧ D 主題「王朝恋物語」
 ⑨ B・D 主題「(普遍的な) 恋の物語」
 B前半 副題「三角関係」
 ⑩ A・D 主題「男のロマンと女の現実」

- ①筒井筒の昔より業平との結婚を待ち、結婚後は高安の女へ通う夫のわが許へ帰るのを待ち、三年間の空白を桜とともに待ち、三年目の夜、業平を追って、追い続けて息絶える（中略）人待つ女のひたむきな業平への思恋が、美女男装の移り舞という形で、激しいまでのたかまりを見せる。
 （伊藤正義「各曲解題・井筒」、『日本古典集成 謡曲集』新潮社1980）
- ②高安の女の、日常性に生きる姿を配置することによって、あらためて（中略）女の（中略）自ら、己のあるべき姿を規定している（中略）。「人待つ女」の「待つ」という行為は、女によって選び取られた生きる姿勢、厳しい自己規定の姿として浮かび上がってくる。（中略）。「筒井筒……」の歌の瞬間にあった自分であり続けること以外にはなかった（中略）。「人待つ女」の歌として解釈される「風ふけば沖つ白波……」の和歌は、（中略）「筒井筒……」の和歌に執しての展開である（中略）。謡曲「井筒」のシテ「井筒の女」はその本性を「人待つ女」として名乗りをあげる。（中略）『伊勢物語』17段にある和歌からの転用である（中略）。その後、24段の（中略）和歌の一部（中略）「人待つ女」の歌とはいえない。しかし、これらの引歌は、和歌によって象徴され担われる「人待つ女」、

物語りを私たちに暗示する役割を担ってはいないか（中略）。女は業平の衣を着込むことによって、業平その人となった（中略）。「井筒の女」は一体化したのは「筒井筒……」（中略）の歌の一瞬の業平である。（中略）「井筒」の心を「人待つ女」とするところから、逆に、その一瞬を（中略）永遠化させようとする（中略）。（馬場光子「人待つ女—謡曲「井筒」論」『国語通信』1989）

- ③井筒のもとで、たけくらべをしながら実らせたい幼い恋。やがて念願のごとく夫婦となったものの、心を余所に移した男に見捨てられそうになった女の、ただひたすらに耐えて、待って、男を思い続ける心が通じて、ふたたび愛をとりもどす（中略）。都へ出たまま3年を帰らぬ夫。若い妻の夫への信頼と一人待つ心のわびしさ。夫への変わらぬ愛をいだきながら、3年の月日を持って待って、待ちわびて、ふっと心の風にさそわれるように、親切に言い寄ってくれた男に身をまかせる気になった3年目の一夜、新枕を交わした直後におとずれたのは、いとしい夫であった。（中略）変わらぬ愛を告げる女の言葉を背に、立ち去っていく男のあとを、女は懸命に追う。（中略）第24段そのもの、23段につづいて女の不変の愛をテーマに〔している〕。生前に業平を待って過ごした女が、今もなお待ち続ける姿のうち、僧の夢はいつしか破れほのぼのと夜が明けるのである。

（堀口康生「待つ女—「井筒」の手法」『猿楽能の研究』桜楓社1978）

- ④第24段のは、3年間業平を待ち続けた女が、ついあきらめて他の男と契ろうとした夜に業平が訪れたため、必死にその後を追って走ったあげく、清水のほとりで息絶えるという話で、この女も有常の娘とされています。つまり、中世の注釈書では、23段・17段・24段のヒロインを同一人物だととらえることにより、業平との結婚を待った女が、結婚後別の女に通う夫が自分のもとへ帰るのを待ち、桜と共に夫を3年待ち、最後には、夫に追いつかなくて死んでいくという一つの物語だと考えているわけです。本曲でもそのイメージは貫かれ人待つ女ともいわれる井筒の女の、死後もなお業平に寄せる一途な思いが描かれています。（『国立能楽堂』プログラム108号 1992 156号 1996）
- ⑤初恋の全き幸福と、第三者の介在によって生じたあらゆる不安に耐えてのちの愛の復活（中略）「人待つ女」としてのその後のさらに辛い体験の、また亡霊の「迷ひ」のままの出現の、（中略）ブレイクドとなった（中略）「風ふけば」物語（中略）「筒井筒」物語（中略）。幸福な思い出に浸った前場とは変わって、「あだなりと……」の歌を詠み、「人待つ女」と呼ばれる境遇にあった、という彼女の裏面をいきなりさらけ出す。前場の幸福な思い出だけなら、その思い出への執着も「迷ひ」となるほど深くはならず、夜ごとに現れる必要もなかった（中略）。「人待つ女」と言われた当時の意識で「筒井筒の昔」を懐かしむのであり、「形見の直衣」も（中略）二人が夫婦生活を幸福に営んでいた頃の記念として、彼女が肌身離さず所持していたものである。生前、（中略）業平の舞いを舞ってみることでわびしさをまぎらわしていたのだろう。

（西村聡「『人待つ女』の『今』と『昔』」『皇学館大学紀要』1975）

- ⑥業平を恋い、業平を待ち続ける。だが、それがもはや取り戻しえないこと、すでに過ぎた昔のことであることはわかっている。だから忘れて生きるのが望ましいし、それを望みもする。にもかかわらず、忘れられずに事にふれては思い出す（中略）。有常の娘の靈魂は何に執しているのだろうか。業平への恋の情念である。「風吹けば沖つ白波…」と詠んだとき、あるいは井の水に「面を並べ袖をかけ」互いの姿を形を映したとき、それぞれの瞬間において有常の娘の業平に対する恋の情念が激しく燃え上がり、みずからも気づかぬうちにその極限に達していた。彼女の恋の情念は（中略）業平との今ここで十全な合一への渴望である。（中略）今ここで十全な合一への渴望は至福な共生への願望とは質を異にする情念である。（中略）恋の情念は（中略）絶対の願望である。人待つ女と呼ばれた（中略）。今ここで十全な合一への渴望が充足されずにとどまったのは、対たるべき存在としての業平が今ここに非在だったからである。「風吹けば…」と詠んだときはいうまでもなく、

井の水に互いの姿を映したときも、幼さ故に離れて住まねばならないことが写し出されていた。ともに住むようになっても業平はいつも花のように美しく、眩しいばかりに華やかで浮薄だった（中略）。非在の業平を、筒井筒の昔からずっと幾年も待ちつづけて、業平が死んだ今も舞っている（中略）。恋の情念は裸形のまま噴き出そうとしている。水面には業平が映っている。物語のなかの存在でありつつ、非在に超えた業平がそこにいる（中略）。業平との今ここで十全な合一は成就したかに見える。

（佐藤正英『「井筒」を巡って夢幻能の構造』『季刊 日本思想史』39号 ぺりかん社1992）

- ⑦現世にいながら思いを寄せる、すなわち「待つ」というあり方だけをしたいのである（中略）。「待つ」ときに問題にされるのは「いにしへ」の具体的なことがらではない。（中略）。「恋う」ことそれ自体がまことの「われ」のありようなのだ。ワキに誘導されて、娘はまず、歌によって忍び妻に通う夫を取りもどしたいというエピソードを語る。不在の夫の安否を気づかうというのは、いつてみれば自己内の「恋する」という観念作業である（中略）二目に語られるは幼時の歌の返答である（中略）成立している相愛関係（中略）。「いにしへ」の姿を明らかにした後、後場で娘は業平の直衣を身にまとい、昔男に乗り移って「いにしへ」との合一をはかろうとする。

（上田哲之『「井筒」に見えるいにしへの構造』『季刊 日本思想史』24号 ぺりかん社1984）

- ⑧秘伝の内容が一曲の構想に直接かかわるといえることはない（中略）。単純された作品構想であることを指摘しておきたい。「井筒」の意図するところは、秋の夜、荒涼たる旧蹟に、王朝物語の哀艶を構築することであり、紀有常娘に業平を重ね合わせて、美女男装の移り舞を視覚的効果の中心に置くのである。

（伊藤正義『伊勢物語と謡曲』『鑑賞 日本古典文学五 伊勢物語・大和物語』角川書店1975）

- ⑨高安の女との三角関係など、こうした方法によって紀有常の娘のひたむきな思いだけをクローズアップさせることに成功しています。そしてなお、回想をより遠い昔、二人の幼いころへと逆転させることで、美しい恋愛の情の純粹な高揚を引き出しています。こうした心情がピークに達するのが後段の序の舞です。回想形式をとって語られてたことによって、もはや業平と紀有常の娘を離れ、時代を超えて誰の心にもしみわたる、普遍的な恋の物語となったとき、もはや言葉も必要ではなく、現実的、具象的な型も用いずに、ただ純粹に抽象的な舞によって高まった精神を噴き出させます。観客はそこに、単に業平と紀有常の娘の愛の永遠性を見て取るだけでなく、自らの心にある恋慕——少年はまだ見ぬ恋に思いを馳せ、青年は熱き思いを増幅し、熟年は暖かな思いやりで受けとめ、老人はなつかしく甘美な郷愁を呼びさます——を見てとることができると思います。

（『国立能楽堂』プログラム14号1984、25号1985、75号1989）

- ⑩『井筒』は愛の永遠性がテーマだと言われている。「人待つ女」の美德と可愛さ、可憐な少女の側面と、成熟した大人の女の思いを併せ持つ主人公。このように書いてみると、これはもう男の理想・男のロマン以外のなにものでもない。私自身は、『井筒』の典拠となっている『伊勢物語』23段は嫌だし、業平みたいな身勝手な男は願い下げにしたい。ひたすら男を想っている女なんて、世の中にそういう話は腐るほどあるのだから、能の中でくらはいやめにしてほしい、という思いがないわけではない（中略）。

ところで、ひたすら男につくし、男を許し続け、男を待つだけという女、表面的にはそう見える『井筒』の女は、深く読み取ってみると違ってそういう女ではない。井筒の女は自己完結した世界に生きているのである。今の彼女にとって、業平は存在しているようでいて、実はいない、いなくてもいい存在である。暁ごとに仏に手向ける閻伽の水を汲む女は（中略）誰も求めず、誰にも頼らず、思い出の中の業平と共に、閉じられた世界に住んでいる。業平に成り変って舞を舞い、水鏡

の中の自分を見て懐かしむだけ（中略）。誰も必要ではないくらい孤独な女だ。「井筒の女はまさに男の理想である」などと簡単に口にする現代の男たちは、こういう女の内面をどのくらいわかってしているのだろうか。（中略）。

男の眼から見た理想の恋人というのは、女の側から見ると、完全な自立を果たし、自分の意志で生きていける能動的な人間である。それは男女関係の本質であり、井筒の女に限らず、現代にいたるまでまったく同様である。

（三宅晶子「男のロマンと女の現実」『世阿弥は天才である』草思社1995）

資料3 『井筒』アンケートと解答一覧

『古典と現代人』というテーマで論文を書いておりますが、皆さんの御意見を参考にしたいと思っております。お手数ですが、御協力をどうか宜しくお願い申し上げます。

R・マルジネアン（早稲田大学大学院文学研究科日本語日本文化専攻博士課程在学中）

アンケートの正確さのために、以下の項目のなかから、適切な項目を選んで、○を付けて下さい

・年齢 17歳迄 17～22歳 23～30歳 30～40歳 40～50歳 50～60歳 60歳以上

・性別 女性 F 男性 M

・職場 企業 高校・大学（教職員・学生） メディア関係 主婦 その他（……）

・今回の公演については、どの方法で情報を得られましたか

- 1 能楽堂のチラシ 2 雑誌報告 3 関係者からの招待 4 お稽古を通じて
5 その他（……）

イ 『井筒』という謡曲については、今回の公演を御覧になる前に何かご存じでしたか（適切な項目に○を付けて下さい。複数解答可）。

- 1 『井筒』の公演をすでに… 回見たことがある（初めての方はゼロとご記入下さい）
2 お稽古として、『井筒』の話・舞いを習ったことがある
3 『井筒』のテーマ・ストーリーが分かっていた
a 評論・学術論文から b お稽古用謡本から c 教材・大学のゼミから
d その他（……）

4 公演前（中）にパンフレットを読んだ

ロ 『井筒』のストーリーの中心的な部分は女主人公による夫との恋愛物語の回想であるが、能楽研究においては、それに関する解釈は大きく以下のような二つの系統に分けられている。あなたの感性に一番合うと思う解釈に○を付けて下さい。

- A 有常の女と在原業平が恋愛結婚をしたが、暫くすると、夫が新しい愛人のところに通うようになる。有常の女は彼を取り戻そうとし、在原を待ち続けている。
B 有常の女と在原業平が恋愛結婚をしたが、暫くすると、夫が新しい愛人のところに通うようになる。有常の女は彼を取り戻そうとするが、別れたまま三年が立ち、彼女が再婚を考えている。再婚する前夜に在原が戻ってくる。有常の女は彼への思いを訴えるが、在原は信じず、そのまま去って行く。

ハ あなたがお選びになった解釈のなかで描かれた女主人公を一言で評価なさって下さい

ニ 今回の公演のなかで、一番印象に残ったのは何ですか（○を付けて下さい。複数解答可）

- 1 シテの演技 2 ワキの演技 3 ストーリ 4 装束 6 地謡 7 音楽的な側面
8 能面

アンケート解答一覧

年齢	性別	解釈	解釈の詳細
	M / F	24段 無し / 有り	
☑			
17-22	1 / 0	1 / 0	待ち続ける静かな存在
23-30	1 / 0	1 / 0	和歌で不倫をしている夫を取り戻す風雅な女
30-40	1 / 1	2 / 0	分からない (F) Rilkeの「対象を突破する愛」(M)→②
40-50	1 / 0	1 / 0	愛の普遍性
50-60	2 / 1	3 / 0	待つ女の哀れさ (M) 日本の古いタイプ (自分を殺して、夫のこのみ を思い続ける) の女。この時代では当たり前 の女だっただろう。(F) } ①
60-	5 + 1 (不明)	6 / 0	愛する男を縛らない女 可愛い女性・利口な人 優しい女性 (2) 夫への気持ちを貫く強い女性。愛の普遍性。 純情可憐な女性
☐			
17-22	1 / 0	1 / 0	愛の普遍性
23-30	2 / 7	9 / 0	女性らしい生き方をしている。妻としてすばらしい。 嫉妬するのも別れるのも意味がなく、彼女の態度は当然 である。 愛の普遍性 (3) 愛の普遍性。愛されていない不幸な女。 夫への気持ちを貫く強い女性。愛の普遍性 (2) 哀れさ 相手なくていい。自分の中の幻想でいい。.....→② 「愛」を越えた「空」の愛。
30-40	0 / 6	5 / 1	愛の普遍性 愛されていない不幸な女 悲しい女性 (2) 死者の愛 別れた夫に対して未練が残るのは女性らしい.....→③

40-50	2 / 11	12 / 1	愛の普遍性 (7) 理想的 (1) 夫への気持ちを貫く強い女性 夫の浮気を許す良き理解者 (2) やさしい女性 (2) 別れないのは相手の女性に対する意地。男に対する懐かしさは意地らしい。 別れた夫に対して未練が残るのは女性らしい。愛されていないことが分かり、夫を解放するやさしい女性である。 ③
50-60	1 / 0	1 / 0	夫への気持ちを貫く強い女性。
60-	2 / 1	3 / 0	嫉妬するのも別れるのも意味がなく、彼女の態度は当然である (M) 愛の普遍性 女性らしい生き方をしている。妻として素晴らしい。可愛い女性。

イ 1997.10.17 「鏡仙会」『井筒』公演 400枚のうち14枚 解答率 3.66%

ロ 1997.4.7 「橋の会」『井筒』公演 400枚のうち31枚 解答率 7.75%

注

- ① 伊藤正義 「謡曲と伊勢物語の秘伝」『金剛』64号 1965
西村聡 「人待つ女」の『今』と『昔』『皇学館大学紀要』18、1975
- ② 『日本古典集成 謡曲集』『各曲解題』新潮社 1980
- ③ Umberto Eco “The Role of the Reader” Hutchinson & Co.1981、『物語における読者』（篠原資明訳）青土社 1994
- ④ Anthony Giddens “Sociology” Polity Press 1989
John Fiske “Television Culture” Routledge 1987
- ⑤ H.G.Gadamer “Warheit und Methode” J.C.B.Mohr, Tubingen 1965
Jonathan Culler “Structuralist Poetics” Routledge and Kegan Paul 1975
- ⑥ 三宅晶子 「男のロマンと女の現実」『世阿弥は天才である』草思社 1995
- ⑦ P.Bourdieu “La domination masculine” ed. de Seuil, 1998・John Fiske “Television Culture” Routledge 1987
- ⑧ 井上輝子・江原由美子編 『女性のデータブック』、有斐閣 1991
- ⑨ 石坂晴海 『×いちの女たち』・『×いちの男たち』扶桑社 1995・『やっぱり別れられない』飛鳥新社 1994
- ⑩ 竹本幹夫 「在原業平 愛の追憶 - 『井筒』、『杜若』など」『国文学』1983
- ⑪ こうした古注が表している中世の考え方を伊藤のように「現代人の我々から見て、いかに間違いだらけであり、驚くべき牽強附会の説である」と、一方的に否定できないものと思われる。
- ⑫ H.G.Gadamer “Warheit und Methode” J.C.B.Mohr, Tubingen 1965

- ⑬ 『井蛙抄』、佐佐木信綱編『日本歌学大系』風間書房 1971
- ⑭ 拙稿「能の作品研究における解釈の規則およびその真実について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』42・3、1996
- ⑮ 田端泰子『日本中世女性史論』塙書房1994 49頁
- ⑯ 田端泰子、前掲書59頁
- ⑰ 田端泰子、前掲書59頁
- ⑱ 総合女性研究所編『日本女性の歴史 性・愛・家族』角川書店 1992、92頁
- ⑲ 田端泰子、前掲書47頁
- ⑳ 高群逸枝『平安鎌倉室町家族の研究』国書刊行会 1985
- ㉑ 注18前掲書
- ㉒ 田端泰子『日本中世の女性』吉川弘文館 1987 258-259頁
- ㉓ 国立能楽堂プログラム 14号 1984

討議要旨

N・リスクティン氏の、「ジェンダー」という語はたいへん複雑な言葉だが、どういう意味で使用したかとの質問にたいして、発表者は、ジェンダー研究にはさまざまな方法論があるが、今回は、女性の身体を持ちながらも男性のような価値観をもつことができるし、逆も可能である、というように、生まれた身体の性と価値観としての性というジェンダーの相違点を考えていたと回答された。「ジェンダー」に関してさらにリスクティン氏から、発表は謡曲のテキストを基本とした解釈であったが、パフォーマンスとしてはどう捉えるのかという問いが出され、男性のみが能を演ずるという問題をジェンダーという観点から分析する必要はあると思うが、今回はパフォーマンスは考慮にいれていないという答えがあった。

また、S・スピアーズ氏より、ジェンダー意識というのはかなり近代的な概念だと思われるが、それを中世の謡曲の研究にあてはめることが可能かどうかという疑問が提出された。発表者からは、ジェンダー意識が概念として研究に用いられるようになったのは現代であるにしても、社会現象としてはどの時代、社会においても存在するものだと考えている。ただ現代人のもっている「意味」をそのまま別の時代や社会にあてはめることはできないという点は注意する必要がある、との返答があった。

江口季好氏より、「時代性」「多義性」ということに関して、幼時の頃の二人が井戸に映った自分たちの姿を懐かしむという場面であるが、古今和歌集や西行の歌にも幼時を追懐するものがある。中世文学の中に「子供回帰」という大きな流れがあり、それが多様な分野に存在しているということをも多義性の問題として考えられないか、という意見が出された。これに対しては、多義性については一つの作品だけでなく、同時代の多くのテキストを照らし合わせて見ることで重要な観点が得られると考えるが、「子供回帰」については今回の発表者の論点とは少々異なるとの回答があった。